
山本太郎左衛門の話

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山本太郎左衛門の話

【Nコード】

N3098F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

備後の稲生武左衛門はひょんなことから肝試しに出ることになった。ところがこれが三十日に渡る怪異のはじまりだった。古典に残る作品をかなり忠実に蜀説にしました。

第一章

山本太郎左衛門の話

享保年間のことであつた。備後の国に稻生武左衛門という男がいた。彼は三次に住むそれなりに地位のある武士であつた。家はそこそこ広くその地では名門と呼んで差し支えのない家であつた。

彼には息子が二人いた。長男を平太郎という。そして次男は勝弥といった。二人はそれぞれ剣や馬を好み武芸が達者なことで知られていた。それを生かして武芸の師範をしている。家には道場まであった。

彼等は相撲も好きでありよくした。それについての話をするのも好きであり隣にいる三津井権八とはよく相撲をとり、そしてその話をして酒を飲んだ。暇な時はこうして時間を過ごすのが常であつた。時は寛延二年になつていた。次は皐月の末である。そろそろ暑くなるうかという時である。この日も黄昏時平太郎とこの権八は相撲の話肴に酒を楽しんでいた。

二人は縁側にいた。そして瓢箪にある酒を杯に酌み二人で談笑していた。

見れば日はそろそろ暮れようとしている。そしてまだ淡い色の草が濃紫の世界の中に消えようとしていた。

「のう平太郎殿」

権八は一杯飲み干すと彼に対して言った。

「どうした、権八殿」

平太郎は梅を食べていた。酒のつまみである。種を吐き出す。右手に出すとそれを外に投げた。

種は壁を越えて路に消えていく。そしてその向こうに姿を消した。

「最近肝試しをしておらんなあ」

「肝試しか」

平太郎はそれを聞き顔を権八の方に戻した。

「そうじゃ、ちよいと暇潰しも兼ねてどうじゃ」
「ううむ」

彼は腕を組み暫し考え込んだ。確かに最近相撲や剣のことばかりで肝試しといったものはしていなかった。肝っ玉も武士にとっては欠かせぬものである。それがなくては侮られてしまう。

「やってみるか」

「そうこなくてはな、流石は平太郎殿じゃ」

権八はにこりと笑って言った。そして早速彼に己が考えを述べた。
「まずは百物語をしようぞ」

「百物語か」

まず蠟燭を百本用意しておく。そして暗い部屋の中にそれを照らし怪談をしていく。一話語り終えることに蠟燭の火を一本消していく。こうして百話の怪談を続けていくのである。

これが全て終わった時何かが起こると言われている。だがそれが何かは誰にもよくわからない。

「無論それだけでは終わらぬ」

「やはりな」

平太郎はそれを聞きいよいよ楽しくなってきた。

「そこからじゃ。終わったらすぐに比熊山に登ろうぞ」

「比熊山か」

その山はここから少し行ったところにある。御腕の様に見事な形をした山だ。武芸で鍛えた彼等にとってはとりたてて高い山でもなかった。

「そこを登る。交代でな。どうじゃ」

「ううむ」

彼は興味深げな顔で考え込んだ。そしてようやく口を開いた。

「よし、やろうぞ」

にい、と笑って答えた。こうして話は決まった。

二人は夕食を採り早速百物語をはじめた。そしていよいよ山に登ることになった。

「まずはわしじゃ」

権八がまず向かった。

やがて彼は帰って来た。聞くと何もなかったという。

「そうか、やはり百物語といっても何もないのかのう」

「いや、わからんぞ」

権八はそれを聞いて笑った。

「まだお主が残っておるからのう」

「はは、確かに。ではわしが化け物にでも会って来るか」

彼は豪快に笑ってそう言った。そして今度は彼が比熊山に向かった。

山の中は暗闇に包まれていた。梟や山犬の鳴き声が響いてくる。

「ふむ」

だが彼はそれに臆することがなかった。犬程度なら何匹かろうが倒す自身があった。

「わしは刀だけではないからのう」

彼はいつも他の者に対し自慢げにこう言っていた。彼は刀や相撲だけでなく弓や槍、そして手裏剣等も学んでいたのだ。

今も懷に石を忍ばせている。これで山犬が襲い掛かって来たならば一撃で倒すつもりであった。

「腕が鳴るわ」

彼にとってはこの肝試しは武者修行でもあった。本来肝試しはそうした意味があったが当時には既に余興の一つとなっていた。それも時代が泰平だからであった。

第二章

時折茂みがガサゴソと鳴る。何事か、と横を見ると気配は消えている。

山ではよくあることだ。小さな獣が動き回っているのだ。これまでも彼はこの山で幾度も肝試しをしているのでこうしたことには慣れていた。

「どうせ鼬であろう。下らぬ」

実際にそれは鼬であった。他にも狐や狸もいる。夜の山には様々な生き物が蠢いている。

ミミズクが飛び木の上では梟がその丸い目を輝かせて止まっている。空には限り無く黒に近い青の空に黄色い月が不自然な程大きく光っている。

平太郎はその中を黙々と進んでいった。

山道自体はどうということはない。彼にとっては遊び場である。

だが酒のせいかな少し疲れてきた。

「暫し休むか」

側にあつた岩に腰かけた。そして一服した。

落ち着くとまた歩くのをはじめた。そして頂上に辿り着いた。

「ふむ」

そこは普段と変わりなかった。それを見届けると彼は今来た道を引き返して権八のところに戻って行った。

「何かあつたか」

平太郎が帰って来るのを見ると権八はまずそれを問うた。

「いや、何もだ」

だが彼は頭を振ってそれを否定した。結局彼もその時は何にも遭うことはなかった。

「やはり化け物なんておらんもんじゃのう」

「ああ、しかし余興にはなつたわ」

そして二人はまた酒を酌み交わすのであった。その日はそのまま朝まで飲んだ。

それから一月が過ぎた。月は文月になった。

すっかり暑くなつてきていた。日は高く昇り毎日嫌になる程照らしてくれる。朝には朝顔が露で化粧して姿を現わす。夕立の後はそのうだる様な暑さもましになり夜と共に螢がその淡い光で闇の中を照らす。月はその上で白く光り輝いていた。

平太郎はその時家の中で飲んでいた。やはり夜は酒であつた。

「美味しいのう」

瓢箪が二つ転がっている。そして今三つめに手をかけていた。

一杯口に入れる。酒の味が舌に染み入り香りが口の中を支配する。時は丑三つ時頃であろつか。

不意に燈火が消えた。だが風の気配はない。

「何事じゃ」

顔を上げれば障子が火が点いた様に赤くなっていた。火事かと思うがどうやらそれではないらしい。

「熱くはない」

そうであつた。そして熱気すら感じなかった。

よくよく目を凝らせば障子は真ん中だけが赤かつた。それはまるで円の様である。

「目か」

ふとそう思つた。立ち上がり障子を思いきり開ける。

「何奴じゃ」

その向こうには廊下がある。そしてさらには壁がある筈であつた。

だがそこには壁とは別に何かがいた。それは巨大な大入道であつた。見ればその目は顔の真ん中に一つしかない。しかも爛々と赤く光っている。まるで闇の中の篝火の様に。先程の赤いのはこの目であることは疑いようがなかつた。

「化け物か！」

平太郎は問い詰めた。だがその化け物は答えなかった。

そのかわり腕を伸ばしてきた。丸太の様に太く、そしてあらあらと毛の生えた醜い腕であった。

見れば指が三本しかない。やはり化け物であった。

「くっ！」

平太郎はそれをかわし後ろに飛び退いた。そして後ろにある槍を手にした。

「さあ、来るがよい」

彼は臆してはいなかった。来たならばすぐに殺すつもりであった。その目、一突きにしてくれようぞ」

だが化け物はそれで姿を消した。そして朝になるまで姿を現わさなかった。

「化け物とな」

平太郎は昨夜のことを権八と弟である勝弥に話した。

「そうじゃ、大入道の様な一つ目の化け物がな」

彼は二人に昨夜の出来事をその場所を指し示しながら説明した。

「こう手を出して襲い掛かってきたのじゃ。おそらくわしを握り潰すつもりだったのじゃろう」

「何と」

二人はそれを聞いて思わず息を飲んだ。

第三章

「それで兄上はどう為されたのですか」

「わしか」

勝弥の言葉に顔を向けた。

「はい、ご無事だったところを見ると大事には至らなかったようですが」

「うむ」

彼はそれについて一呼吸置いて二人に説明した。

「槍を出してな。何とか難を逃れた」

「それはようございましたな」

「それでだ」

平太郎はここで勝弥に顔を向けた。

「そなたは暫くこの家を離れるがよい」

「そうしてですか!？」

「その化け物じゃが」

彼は話しはじめた。

「あの大入道だけではないかも知れぬ。また出てきたらお主にまで迷惑をかけてしまうからな」

「しかし」

「よいな」

彼は弟に対し強い声で言った。

「・・・・・・わかりました」

兄の意志の強さはわかっていた。ここはそれに従うことにした。こうして勝弥は叔父の家に行くことになった。家には平太郎一人が残ることになった。

「よいのか」

夕暮れ平太郎と権八はまた二人で飲んでいた。その席で権八が問うた。

「何がじゃ」

夕食と一緒に飲んでいる。平太郎は飯を胃の中にかき込んでいた。
「勝弥殿を行かせてじゃ。弟殿もかなりの武芸者ではないか」

「ふむ」

平太郎は飯を食べ終えた。そして椀に酒を入れた。いささか無作法であるが茶がないのでそうした。

「確かにのう。あいつがいれば百人力じゃ。あいつは槍ではわしよりも上じゃろう」

「では何故じゃ」

権八は不思議な顔をして問うた。

「これはわしの問題じゃ」

彼は椀の中の酒を飲んで言った。

「お主とわしが百物語をして出て来たと思う。あの時のことは覚えていよう」

「うむ」

何よりも言いだしっぺは彼である。忘れる筈もなかった。

「原因はおそらくわしじゃ。そうでなくては化け物が来るものか」

「それはそうじゃが」

「なあに、心配するな」

平太郎はここで笑ってみせた。

「わしとてむざむざやられるつもりはないわ。それに前から一度化け物を退治してみたかったのじゃ」

「そうか」

権八はそれを聞いていささか呆れたものを感じた。平太郎の豪胆さは知っていたがここまでくると無謀にすら思えたのである。

だが言うのは避けた。言ってもおそらく引かないからだ。

「よいな、ここはわしに任せてくれ」

「わかった」

頼まれれば助太刀するつもりであった。共に余興として百物語をしたからだ。だが平太郎のこの言葉でそれは止めた。彼自身がそれ

を全く望んでいないからだ。

「ではな」

「うむ」

酒を飲み終わると権八は帰っていった。そして家には平太郎一人が残った。

「さて」

空が次第に暗くなっていく。紅の空が次第に紫になっていく。

「今夜も出るかな」

彼はそう言つと部屋に戻った。そして化け物を待ちながら書を読んだ。武士は学問もなくてはならぬ、常々そう言われていたからだ。「まあ一応は読んでおくか」

彼は学問はあまり好きではなかった。そんなものは学者にでも任せておけばよいと考えていた。

だが最早戦国の世ではなかった。とうの昔にそれは終わり今は学問の時代であつた。

とりあえずは論語を読んだ。一章を読み終わるとそれを閉じた。

「さて」

すっかり暗くなつていた。彼は事に備えた。

やがて行灯の火が急に強くなった。

「む」

見れば火は次第に強くなっていく。そして火はまるで蛇の様に長くなりあともう少しで天井に着く程になった。

「あやかしか」

そうとしか考えられなかった。平太郎は咄嗟に身構えた。腰の刀に手をかける。その時であつた。

今度は何やら匂いがしてきた。

「何じゃこの匂いは」

まるで腐った魚の様な匂いであつた。生臭く鼻につく。

「何処からじゃ」

それは居間の方からする。彼は刀を手にしたまま居間に向かった。

そこではまた妙なことが起こっていた。

何と居間に水が流れているのだ。波をうち流れている。

「また妙なことが」

水の源を探す。だが見つからない。

とりあえず寝室にまでは及ばないのでその時はそのまま捨て置いて寝室に帰った。そして刀を手にし壁にもたれかかったまま休んだ。

第四章

その日はそれで終わりであつた。特に何も出ることはなかった。翌日は子の時であろうか。行灯が急にその姿を変えた。

「また行灯か」

平太郎は行灯に目を向けた。見れば木から見る見るうちに石になつていく。

「妙なこともあるものじゃ」

三日目なのでいささか落ち着きを持っていた。そしてその行灯が石になつていくのを見守つた。

やがて行灯は石塔になつた。そしてその場に立っていた。

「ふむ」

蠟燭はそこにある。先程と変わらず部屋を照らしている。

すると今度はその火が激しく燃えだした。昨日と同じか、と思つたが違つた。

石塔は火に包まれた。そしてその全てが包まれると今度はまた行灯になつた。

「これはまた面白い余興じゃ」

自分に危害が及ばないせいもあり笑つて見ていた。寝転がり酒をちびちびと舐めている。暫くすると天井がピクリ、と動いた。

「今度は天井か」

ふと上を見ると青く丸いものがあつた。大したことはないと思ひその時はそのまま眠りに入つた。

「やれやれ」

蚊帳の中に入る。そしてそのまま床についた。

暫く眠つた。だが何やら声がする。それで目が醒めた。

「さては」

出たな、と思ひ刀を手に蚊帳を出る。障子の向こうから女の声がする。

「女怪か」

一昨日は大入道であつた。ならば今日は何か。

「鬼婆でも出て来るかの」

冗談混じりにそう言った。だが声が若いのでそれはないと思い直した。

障子が一人であいた。そしてそれが中に入って来た。

「！」

それを見て流石の平太郎も思わず息を飲んだ。それはまた何とも異様な化け物であつた。

「けけけけ」

それは女の首であつた。逆さになっており首の切り口から血とはらわたを少し出している。

そしてその長く黒い髪を使い歩いてゐる。おそらくそれで障子を開けたのであろう。

「また奇怪なものが出て来たものじゃ」

首はよく見れば整つた顔をしている。だがその顔は青白く目はこちらを奇妙な形で見下ろしている。それがやけに癩に触つた。

「むん」

平太郎はそれを感じすぐに刀を一閃させた。それでこの面妖な物の怪を成敗するつもりであつた。

だがそれは適わなかつた。首は髪を使い後ろに跳び退いたからであつた。

「甘い甘い」

首は平太郎を笑いながらそう言った。そしてその髪に力を込めた。「来るか」

今にも跳びかかつて来そうであつた。彼はもう一度刀に手をかけた。

だが首は平太郎に隙がないのを見て迂闊に動きはしなかつた。しかし隙を窺い続けている。

そうしている間に時間だけが過ぎていく。やがて夜が明けてきた。

鶏の声が聞こえてきた。すると首は音もなくすつ、とまるで煙の様に消えていった。

「終わったか」

平太郎は鶏の声とその首が消えたのを見てようやく一息ついた。見れば障子の向こうがもう白くなっている。

とりあえず寝ることにした。そしてとりあえずは疲れを癒すことにした。

「疲れていては何もできぬ。まずは休むでしょう」

そのまま寝転がると暫し眠った。

日が高くなる頃に目が醒めると何やら騒がしい。表を見てみると何やら人が大勢集まっている。

「どうしたのじゃ」

平太郎は早速彼等に声をかけた。

「おお稲生様」

彼等は平太郎の顔を見ると興味ふかけに彼の顔を見た。

「ご気分は如何ですか」

そして彼に問うてきた。

「気分とな」

彼はそれを聞き少し面妖そうな顔をした。

「よくはないが」

やはり化け物や怪異に三日続けて遭うと落ち着いてはいられなかった。だがそれはできるだけ顔には出さなかった。

「何やら色々とおありのようで」

彼等はどうやらこの屋敷の噂を聞いて来たようだ。興味本位であるのが一目でわかった。

「まあおう」

彼もそれを否定するつもりはなかった。あつさりとそれを肯定した。

そして彼等を家の中に入れた。外で話をするのも気が引けたからであった。

第五章

「まあ入れ。中でゆっくりと話をしよう」

「それでしたら」

彼等は居間に案内された。そしてそこにめいめいで座った。

「さてと」

平太郎は主人の場所に腰を下ろした。

「まずは最初のことから話すか」

そして一日目の大入道のことを話した。そして翌日のことも。

「この部屋じゃったな」

彼はいささか面白げに話した。

「ここに水が流れてのう」

「本当ですか」

これは誰もがまず疑った。

「本当じゃ。だからわしは嘘を言わぬと言っておろう」

「それはそうですか」

彼は曲がったことを嫌うことでも知られていた。嘘を言う様な者ではないことはここに居る全ての者がわかつていた。

「だから聞け。安心してな」

「はい」

そして今度は昨夜の首のことを話した。話が終わると一同は大いに首を傾げた。

「おかしいこともあるものですか」

「一体何がはじまりやら」

「それがわかれば苦労はせん」

平太郎はそれに対して笑って言った。

「わしも百物語が原因じゃとは思っておるがな。じゃがそれ以外のことはわからぬ。あの者達が果たして何者かもな」

「ふうむ」

皆はそれを聞いてさらに首を傾げた。

「狐か狸ではござらぬかな」

まずはそれが出た。やはり狐狸の類であると考えるのが第一であった。

「いや、それはなかるう」

だが他の者がそれを否定した。

「稻生様のところには犬がいるからのう」

「そういえばそうじゃったのう」

平太郎の家には一匹の大きな犬がいる。彼は闘犬も好きなのでその為の犬である。気は荒く彼と勝弥以外にはなつかない犬である。

狐や狸は犬を嫌う。従ってそれは否定された。

「では何かのう」

「生霊か死霊ではないか」

「大入道は違うであろう」

「そうじゃったな」

こうして亡霊やそういった類も否定された。こうして話は次第にどうとうめぐりになっていった。あれでもない、これでもない、平太郎はそれを止めるわけでもなくただ主の場所に座って皆が話すのを聞いていた。

結局答えは出なかった。平太郎も出るとは思っていなかった。

「そうそうわかれれば苦勞はせん」

夕暮れになったので彼は皆を帰した。そして夕食をとりまた化け物を待った。

「今日は何があるかのう」

そう思いながら書に目を通す。だがそれは進まない。どうも化け物が気になって仕方ないのだ。

進まないのて読むのを止めた。そして寝転がってゆうつりと待つことにした。

喉が渴いたので水瓶をとった。下にして水を椀に注ぐ。だが一滴も出て来ない。

「今度は水瓶か」

そう思い瓶を覗く。すると水は氷となっていた。

「ふむ」

今日の怪異はこれかと思った。水が出ないのでは仕方なくそれを置いた。代わりに井戸の水を飲むことにした。こちらは凍っていない。腹が減ったので飯を少し食うことにした。台所に行き釜の蓋に手をかける。

だが開かない。どうやらこちらでも怪異が起きているようだ。

第六章

「化け物も意地悪なことをするわい」

腹は立たなかった。苦笑するだけであつた。とりあえずは置いてあつたばた餅を食つた。甘いものはあまり好きではないがとりあえずはこれで腹は満たした。

満足して居間に戻ると棚が開いていた。やはり覚えはない。

「またか」

そう呟き横になつた。そして何が起こるか見守つた。

棚の中には鼻紙が置かれている。不意にそれが何枚か舞い上がった。

「ほう」

そしてそれがひらひらと舞い飛ぶ。まるで蝶の様に宙を舞つていた。

それが暫く続いた。やがて全て床に落ちて動かなくなつた。

「終わりか」

平太郎はそれを見届けると用心したままそこで寝入つた。壁に背をもたれ刀を抱いたまま寝た。

次の日に昨日のことを話すと人々はやけがわからないといった顔をした。少なくとも狐狸や霊の仕業ではないだろうとは思つたがそれ以上はわからなかつた。

「物の怪かのう」

それが一番有り得ることかと思われた。だが確証はない。

やはり話はまとまらず夕暮れになると皆歸つた。そして平太郎はやはり一人で妖怪を待つのであつた。

「これで五日目か」

今日も出て来るだろうと思つていた。何やらそう感じるものがある。問題は何が来るか、何が起こるか、であつた。

その途端に來た。木履が食事をしている平太郎のところに飛び込

んで来たのだ。

「早いな」

そう思ったらそれが自然に歩き出した。まるで妖術の様であった。
「ほう、これはこうれは」

食事を食べ終えそれを見る。面白いので酒を出してきて飲みながら見物した。

木履はやがてそのまま歩いて何処かへ去った。これまでのことからこれで終わりだとは思わなかった。

「次の余興は何じゃ」

彼は酒を飲みながら今ここにいるであろう何者かに問うた。

「もつと面白い余興がいいぞ」

すると今度は大きな石が部屋に来た。のっそり、のっそりとした動きである。

「ふむ」

見ればその石は無数の足が生えていた。その足は何と人間の指であった。しかもその関節の部分に目まであった。

「これは面白い。普通の石でないとは」

石は平太郎の側に来たかと思うとすぐに離れた。まるで蟹の様な動きである。

石は苔の匂いを撒き散らしながら部屋中をカサコソと動き出した。ついさっきまではゆっくりとした動きであったのにかなり速くなっている。

「どうやら物の怪も話がわかるようじゃな」

彼は酒を口にしながら言った。

「よいぞよいぞ、どんどん来るがいい。そしてわしを楽しませてくれ」

雷が落ちた様な音がして部屋が明るくなる。そして地震が起こった様に揺れる。だが平太郎はそれを楽しみつつ酒を飲んだ。もう彼にとっては慣れたこととなりつつあった。

次の日は中々来なかった。酒も飲み干してしまい少し寂しくなっ

た。

「今日は誰じゃ!？」

問うてみた。やはり答えはない。そもそも答えなぞ期待してはいなかったが反応がないのはやはり寂しい。

終わったとは思わなかった。とりあえず様子を探った。

「ふむう」

気配はない。とりあえず休もうとしたその時であった。

不意に何かが壊れる音がした。庭の方だ。

「あっちか」

そこには壁はない。竹の柵である。これは朝顔を絡み付かせる為であった。

「何が来たか」

平太郎は玄関に向かいながらそう考えていた。恐怖はなかった。何故か期待があった。

庭に来るとそこは真っ暗闇であった。何もなかった。

「音だけか」

しかしそれは早合点であった。立ち去ろうとした彼の首筋に生暖かい風が吹いてきた。

「来たか」

後ろを振り向く。やはりそこにいた。

それは巨大な醜い老婆の顔であった。大きさは二畳程であろうか。その顔は平太郎を見てニヤニヤと無気味な笑みを浮かべていた。

「大首か」

彼はその妖怪の名を知っていた。とりあえず聞いているのは髪に触れてはいけないということだ。話によると髪に触れると病になるという。

「さて」

見たところここにいるだけで害はない。だが鬱陶しくて仕方がない。

「退くがいい」

彼は小柄を出してそれで眉間を突いた。だがそれでも大首はニタニタと笑っていた。やはりあやかしだけあってこれ位では何ともないようだ。

「どうしたものか」

彼は考えたがどうにもならない。刀で突いても結果は同じだと読めていた。

ならば何をしても仕方がない。小柄はそのままに寢室に帰った。そしてやはり壁を背にして眠った。

「少しは寝転がって休みたいのう」

そう思っても相手は化け物である。用心にこしたことはない。彼は用心の為にそうして眠った。とりあえずは今夜は少しでも多く眠れそうなのが救いであった。

朝になった。目を醒ました彼は昨夜大首がいた場所に向かった。

やはり大首は消えていた。

そのかわりに小柄が宙に浮いていた。彼が前に来るとポトリと落ちた。

「昨夜の物の怪の忘れ物かのう」

彼は小柄を手にして笑った。そしてそれを鞘に収めると家の中に戻った。

第七章

七日は夕食を終えると来た。台所に行くとい白い大袖があつた。

「また女か」

それを見て最初に思ったのはそれであつた。それを聞いたか袖は怒つた様な動きでこつちに來た。そしてその中から手を出してきた。平太郎に触れようとするが彼はそれをかわした。すると手は諦めたかやがて姿を消した。

「行つたか」

姿が消えたのを確認すると部屋に戻つた。そして壁を背にしたまま次の化け物を待つことにした。

「今度は何かな」

そう思うと早速來た。障子がひとりでに開いた。

「よくもまあよく自然に開く障子じゃ」

笑っているところからいつもの者達がやつて來た。

今度は坊主の首であつた。髭があつたり、顔が赤かつたり、髪がまばらに残っていたりするところを見ると破戒僧のものであるうか。それが串刺しになっている。

「生前の悪行の報いじゃな」

おそらくこの破戒僧達は生前の悪事の末にこうした処罰を受けたのだらう。そしてそれを恨みに思いこうして化けて出て來ている。

少なくとも平太郎はそう考えた。

「さて、この連中は何をするのかのう」

刀を持ったまま彼等の行動を見守つた。首達は平太郎を睨んだまま彼の周りを飛び回つた。それ以外はこれといって何もして來ない。ただ飛んでいるだけである。

「袖よりも害はないのう」

気味が悪いがそれだけである。とりあえず油断していなければ何もしきそうにない。彼は首が消えるまで待つことにした。

明け方になると消えた。やはり鶏の声と共に煙の様に消えていった。

「結局一番怖いのは鶏か」

今度から鶏と一緒に寝ようと思ったがすぐに止めた。臭いうえに五月蠅くてかなわないからだ。

そう考えながら横になった。朝だと出て来る心配はない。暫くぶりに寝転がって休むことができ有り難かった。

「朝までいてくれたらいいのだがのう」

ふとそんな考えを持つ平太郎であった。

とりあえずその日はゆつくりと寝た。夕方まで眠りようやく起き上がった。

「よう寝たのう」

気が付くと日が暮れていた。起きるととりあえず飯を食い化け物を待った。

待つただけだと面白くもない、だが書を読む気にもならなかった。

月が綺麗だったのでそれを見ながら酒を飲むことにした。

「やはり月はいいのう」

彼は月が好きだった。満月も三日月も好きであった。

満ちている月は満ちている月で、欠けている月は欠けている月で魅力があった。彼は夜空に浮かぶ黄色く大きな月を見ながら酒をちびり、ちびりと飲んでいた。

月を眺めながらだと酒は一気に飲めない。あくまでそれを眺めながらゆつくりと飲む。それもまた一興であった。

「さてと」

酒がなくなった。彼はそれを脇に置いた。

「今日は何が出て来るかのう」

そして化け物を待った。月を眺めながらゆつくりと待った。

月が山の端に隠れた頃に何やら後ろから物音がしてきた。

「来たか」

彼はゆうつりと後ろを振り向いた。そこでは畳が上がっては落ち、

上がつては落ちを繰り返していた。

それと共に埃が舞う。それは彼のところにも飛んで来た。

「今宵はこれか」

彼は台所へ行つた。そして酒をまた持つて来た。幸い今日は台所には何も出ず楽に取り出すことが出来た。そして埃の届かないところに移りそれを見ながら酒を飲んだ。

「月もよいがこれもまたよいのう」

笑いながら酒を飲む。見れば月を見ていた時より酒が進んでいる。暫く経つとそれも止んだ。彼は寢室に戻り壁にもたれかかつて休んだ。

九日は居間にいた。酒は昨日かなり飲んだので今日は飲まないことにした。

「飲み過ぎは身体に毒じゃ」

父からも弟からもそう注意される。確かに彼の酒量はかなり多かつた。

「大酒も豪傑の証じゃ」

そうは言うもののやはり身体に良くないのは事実であつた。あまり過ぎると確かに身体に疲れがたまってくる。

この日は飲みもせず書を読んでいた。論語ではなく孟子であつた。

第八章

「孟子は言っていることはよいのだが」

彼はこの書については思うところがあった。

「ちと理想ばかり追い求め過ぎておるな。これでは現実に対しては弱い」

彼は現実主義者であった。武芸は現実の世界のものであるからだ。空想で武芸を語っても肝心な時にやられるだけである。彼はそれよりも実際に鍛錬を積み相手を打ち負かすことが必要であると考えていた。

「それでも見るところはあるな」

一方で孟子の良いところを認める度量はあった。

「孟子のいいところは主張がわかり易いところじゃ」

彼はそうした意味で孟子を認めていた。

「人に信用される人間や国になれ、か。それは同感だ」

彼は血気盛んであった。それだけに孟子のそうした正義感の勝つ思想は気に入っている部分があった。

「それに行動が伴わなくてはならん。やはり人は動かなければならんのだ」

そうしたことからは彼は朱子学は好まなかった。陽明学に深い共感を覚えていた。

地合同一、彼は常にそれを念頭に置いていた。

だからこそ武芸にも励んだ。日々鍛錬し己を磨くことが彼にとっては不可欠のことであった。

それを考えると今家に出て来ている化け物達の相手も修業のうちであった。そう考えると苦にはならなかった。

読み終え書を置く。そして寝室に入ると何やら尺八の音が聞こえてきた。

「来たな」

平太郎はその音を聞き笑った。そして障子が開くのをゆっくりと待った。

すると虚無僧が入って来た。尺八を吹いている。どうやら先程の音色は彼等のものらしい。

「成程」

それを見ながら妙に頷くところがあつた。この笛の音を聞いていると何故か気が和むのであつた。

「妙なことがあるものじゃ。化け物の笛で落ち着くとは」

不思議ではあつたが納得した。例え化け物が吹いていても尺八は尺八であつた。それを聞いていると落ち着くのも当然であつた。

見れば一人ではなかつた。そろそろと入って来る。そして彼の周りを歩き回つた。

それ以外は何もしない。やがて彼等はその場に寝転がりだした。

「おい、待て」

かなりの人数である。これだけの数に寝られては流石に彼の寝る場所がなくなってしまう。それを怖れたのだ。

だが相手は化け物である。言つても聞くとは思えない。仕方なく彼は退き壁にもたれかかつた。

「今日もここか」

苦笑しながらまた壁にもたれかかつて眠りに入った。そして朝日が昇ると共に目覚めた。

十日には夕暮れ時に馴染みの者がやって来た。

「久方ぶりじゃのう」

見れば隣の村の貞八である。

「おお、お主か」

平太郎は彼の顔を見て顔を綻ばせた。

二人はかねてよりの馴染みである。やはり武芸を通じて知り合つた。

剣の試合に出た時に会つた。そして勝負をしているうちに打ち解け合つたのである。今では権八と共に気を許せる友であつた。

彼は剣は強いがそれ以外は気のいい穏やかな者であつた。それが豪胆な平太郎とは個性が違いかえって仲を良くした。人は時として違う個性をも認め合うものである。

「どうしてここへ来たのじゃ」

およその予想はついていたがそれでも聞いてみた。

「うむ、面白い話を聞いてのう」

平太郎はそれを聞きやはりな、と心の中で呟いた。

「何でも化け物が出るそうだな」

「うむ」

平太郎はそれを認めた。認めなくとも結局は出て来ているのだ。

「どんなのが出て来ておる」

「知りたいか」

「無論」

貞八は答えた。

「一体何が出て来るのか。少し教えてくれんか」

「ああ、いいぞ」

平太郎はその申し出を快諾した。

「まあ入れ。酒でも飲みながら話そう」

「おう」

貞八もいけるくちである。二人は嬉々として家の中に入った。

「成程のう」

貞八は腕を組みながら話を聞いていた。

「また色々出て来ておるようじゃのう」

「まあな」

平太郎はニヤリ、と笑って答えた。

第九章

「じゃがこれはこれで中々面白いぞ」

「そうなのか」

「うむ、これと言って大した危害はないからな」

彼にとつては大入道も女の首も大したものではなかった。戦場の話に比べれば、と本気で思っていたのだ。

「慣れると案外面白いものかも知れん」

「慣れるとか」

「うむ、そろそろ慣れてきたぞ」

彼はそう言つてまたニヤリと笑つた。

「今度は何が出て来るかとわくわくしておる」

「豪気じゃのう、お主は」

「ふふふ、褒めても酒しか出ぬぞ」

「それだけで充分じゃ」

「そうか、ははは」

二人はこんな話をしながら談笑していた。やがて日が暮れてきた。そろそろかの

貞八は暗くなつてきた外を見ながら言つた。

「いや、まだまだ」

だが平太郎はそれを否定した。

「化け物は勿体ぶつておつてのう。真夜中になれば中々出て来ぬのじゃ」

「本当か」

「うむ。まあ一概には言えぬがな。大体その頃じゃ」

「今は出て来ぬか」

「おそろくな」

「本当か!？」

貞八はやけにしつこく問うてきた。

「じゃから一概には言えぬ。化け物にも色々いるからのう」

「そうかそうか」

彼はそれを聞いて安心した様に笑った。

「では今出て来ても不思議ではないのだな」

「うむ」

貞八はこんなにしつこかったか、と首を傾げた。どうも普段の彼とは違うように思われた。

（何やらおかしいのう）

平太郎はそう思いはじめた。その時貞八の顔が妙な形に歪んだ。

「む！？」

彼は一瞬目を瞠った。そこで貞八は平太郎を見据えてきた。

「その言葉を聞いて安心した」

彼はからからと笑ってそう言った。

「わしが出て来ても不思議ではないのだからな」

「どういう意味じゃ」

「知りたいか」

彼の目から光が消えた。まるで人形の様な目になった。

「ううむ」

平太郎は考え込んだ。どうも答えると何やらよからぬことが起りそうである。だが答えたかった。それよりも好奇心が勝った。

（何が起こってももう驚くこともないわ）

そう考えられる状況でもあった。何を今更、と思った。今までの化け物達のことを思えば。彼は意を決した。

「知りたいのう」

彼は答えた。そして大きく息を吐き出した。

（さて、何が起こるか）

貞八を悠然と見下ろした。

「では見せてやろう」

貞八は頭を屈めてきた。

「わしのとっておきの余興をな」

そう言つと何と彼の頭が割れてきた。

「何と」

これには平太郎も驚いた。頭は頂上から横に真つ二つに分かれていた。そこから脳が見えている。

その脳から何かが出て来た。それは小さな人間の手であつた。

「おぎやあおぎやあ」

中から赤子が出て来た。血と脳漿を身体にまとい無気味な笑みを浮かべながら貞八の脳から這い出て来たのだ。

「今夜は赤子の怪か」

平太郎は既に落ち着きを取り戻していた。そして赤子の動きを悠然と構えて見守つた。

それは一人ではなかつた。何人も這い出て来る。

そして平太郎の周りを這い回る。だがそれだけであつた。

「やはり何もして来ぬか」

彼はそれがわかると安心した様な笑みを浮かべた。

「貞八よ、中々面白い余興じゃな」

そして貞八に対して言つた。

「お主の余興、たんまりと楽しませてもらった。ご苦労であつた」

貞八はその言葉を聞くと悔しがりもせずそのままの態勢で姿を消した。やはり煙の様に消えていった。

続いて赤子達も消えていった。そして後にはやはり何も残らなかつた。

「赤子共の這つた後まで消えているの」

灯りを頼りに畳を見るとそこにも何も残つていなかった。

「さてと」

彼は全てを確かめ終えると壁に背を付けた。

「では休むか。化け物が来たらその時に起きるとしようぞ」

そして彼は眠りに入った。その日はそれで終わりであつた。彼は比較的ゆつくりと眠ることができた。

翌日目が醒めるとまず隣村に向かつた。そして貞八を尋ねた。

「何じゃ？」

聞くと彼はその日はずっと家にいたらしい。彼の家族もそう言った。

「わしの姿を借りたあやかしか」

「うむ、実に瓜二つであつた」

彼は昨夜のことを貞八に説明した。貞八も化け物のことは知っていた。

「面白いのう、わしも有名になったものじゃ」

貞八はそれを聞くと上機嫌で笑つた。

「見たいか」

平太郎はそれを聞き話を振ってみた。

「いいや」

だが彼はそれをやんわりと断つた。

「お主に迷惑がかかるからいい」

「そうか」

こうして二人は別れた。平太郎は暗くなった頃に家に戻つて来た。帰つてみると刀が一振り何処かへ消えてしまつていた。

「これは」

すぐにわかつた。化け物共の仕業だ。

「おい」

彼は天井に向かって言つた。

「あの刀はわしが恩義ある方から譲り受けたもの。隠してもらつては困るな」

それは事実であつた。彼はその刀を剣の免許皆伝の時に祝いの品として剣の師からもらったものだったのだ。

「あれを隠すことは許さん。すぐに戻すがいい」

だが返事はない。これもわかつていることである。

そのかわりに天井から何かがニュツ、と出て来た。それは黒く細長いものであつた。

「むっ」

見ればその刀であつた。それは天井から生える様に出て来ると下に落ちてきた。そして平太郎の手の中に収まつた。

「わかつてくれればそれでよい」

彼は満足した声で天井に向かつて言つた。

「じゃが今度は許さんぞ」

そう付け加えて刀を元の場所に収めた。それが終わると風呂に入つた。普段は夕暮れ前に入るがこの日は遅くなつたので今入つた。

風呂はわりかし好きな方である。今は熱いので行水だ。

「さてと」

まずは盥を取ろうとする。その時だつた。

第十章

その盥が急に宙に舞い上がった。そして宙を飛び回った。

「今度は盥が空を飛ぶか」

平太郎は面白そうにそれを眺めた。

「よいぞ、よいぞ」

そして楽しそうな声を出した。

「普通にいつも風呂に入っては面白くとも何ともない。たまにはこ
うした余興も必要じゃ」

その飛ぶ様を見ながら水を浴びた。そして身体を洗った。

洗い終わると盥は下に落ちた。そして何事もなかったようにその
場に留まるのであった。

この日はそれで終わりであった。だがまだ夜も長いので用心の為
に罌を作っておいた。

「これで少しは悪戯もましになるじゃろ」

自分に対するのはいいが刀にまでちょっかいをかけるのはやはり
腹に据えかねたからであった。

その日はそれ以上何も起こらなかった。やはり用心の為座って寝
たがよく眠ることができた。

「何しろ寝れるのはいいことじゃ」

そう思いながら眠った。心地よい眠りであった。

次の日は朝から縄を作った。これで何かあったならば化け物を捕
らえるつもりであった。やはり昨日刀を取られかけたことが気にな
っていたからだ。

自分にだけ危害が及ぶのはいいが他のものとなると許せない。と
りあえずそれなりの量を作り終え夜を待った。

夜になると家の周りをときの声が覆った。まるで戦場にいるよう
であった。

「今宵は声か」

平太郎はそれを気持ちよく聞いていた。彼にとってはまるで稽古場にいるようでいい気分であった。

男の強い声は好きであった。それだから結局今夜の怪異は苦にはならなかった。

「慣れてきたかのう」

ふん、と口の端を一瞬歪めて笑った。その日はそれで何もなかった。大した日ではなかったな、と思った。

翌日は朝から用事があったので出た。彼は普段は家で仕事をするのだがこの日は外に出た。

夕刻に帰った。すると早速異変があった。

昨日作った縄が全て解かれているのである。そして全て庭に打ち捨ててあった。

「誰じゃ」

と言ったがおおよそのことはわかっていた。化け物の仕業以外に考えられなかった。

よく見れば証拠もあった。そこに大きな足跡があった。

二尺はある。人のものではないのは確かだった。それはやはり三本指であった。

その日は他には何もなかった。いささか拍子抜けするしかなかった。

「いかなのう、もう少し出手欲しいものじゃ」

平太郎は酒を飲みながらそう思った。かえって退屈であったからだ。

翌十四日もなかなか出て来なかった。何時の間にか夜明け近くになろうとしていた。

「出て来なくなったのかのう」

そう思いながら厠に向かった。あまり飲み過ぎたので近くなってきたのだ。

そこで仏壇の前を通った。するとそこで仏壇の前がサッと開いた。「やっとか。待っておったぞ」

平太郎はそれを見て街望んだものがようやく来た様に喜んだ。そしてそこに留まり何が起こるか見届けることにした。

「用を足すのはそれからでいいな」

仏壇が開くと次には障子が開いた。そしてそこから香炉が飛んで来た。居間にあるものだ。

それはひとりでに飛んでいた。ゆらゆらとまるで人魂の様に飛ぶ。そして仏壇の中に入った。小さな香炉だったので何事もなく入った。香炉が入ると仏壇はひとりでに閉じた。そしてそのまま開かなくなつた。

障子も閉じられた。それで終わりであつた。

「今度は香炉か、ふむ」

彼はそれを最後まで見守つて納得したように頷いた。

「毎日毎日趣向を変えてくれて有り難いのう。それにしても」
彼はここであることに気付いた。

「化け物というのは物を動かすことが好きじゃな。これは面白い発見じゃ」

そう言うつと笑いながら廁に入った。そして用を足すと手を荒い休んだ。

十五日にはまた大勢の掛け声が聞こえて来た。

「心地良いのう」

前にもあつた怪異なのでそれが気にはなつたが好きな声なので聞いていた。気分よく聞いているとまたもや障子がひとりでに開いた。そして香の物桶がゆらゆらと飛んできた。それが部屋の真ん中に置かれると障子は閉まつた。

「気がきくのう。よい香りじゃ」

平太郎はそれは化け物の気配りだと感じた。

「化け物も親切なものじゃ。では今宵は心ゆくまで飲むとしよう」
その日は気分よく朝まで飲んだ。掛け声を聞き、香りを楽しみながら飲んだ。

十六日は仰向けになつて寝転がっていた。すると天井が急に迫つ

て来た。

「こんな天井だったかのう」

それは彼の鼻先で止まった。それきり動かなくなった。

「ふむ」

落ち着いて見る。どうやら寝返り程度はできそうな間だ。

「ならよい。では久方ぶりに寝て寝ることにするか。これでは化け物も来れまいし」

そして寝た。起きてみると天井は元に戻っていた。

次の日には何処からか見たこともない男がやって来ていた。

「どなた様でしょうか」

聞いて見ると上田次郎右衛門という。何でも隣の国の者だという。

「拙者剣を教えている者でござる」

同業者であるようだ。そういえば聞いたことのある名だ。

「その他にも実は化け物退治も生業にしております」

「化け物退治をですか」

「はい。主に狐狸を相手にしております」

「成程」

ことの真実はわからないがどうやらそれなりに自信があるようだ。口調でそれはわかった。

第十一章

「こちらに毎夜化け物が出るとお聞きし参上したのですが」

「いかにも」

隠すつもりもなかった。素直に真実を語った。

平太郎はこの上田という男を家にあげた。そして何時何が起こったか詳しく話した。

「ふうむ」

上田はそれを黙って聞いていたが聞き終えたと腕を組んだ唸った。

「また色々なことが起こっておりますな」

「何だと思われますか」

「そうですね。犬を怖がらぬところを見ると狐狸ではないようですね」

「やはり」

それは平太郎も幾らか予想がついていた。では一体何だろうか。

「今夜ここに留まらせては頂けぬでしょうか」

上田はあらためて平太郎にそう申し出た。

「退治されるおつもりですか」

「はい、その化け物が一体何者かわかりませぬが放つてはおけぬでしょう」

「そういうわけでもありませんが」

これは彼の偽らざる本音であった。害はあるが命の危険はない。

むしろ長い夜を飽きさせない有り難い存在であった。最初の頃はともかく退治なぞ思いもよらぬことであった。

「家、そういうわけにはいかないでしょう」

上田はそれを否定した。

「化け物を放っておくことは出来ませぬから」

「そういうものでしょうか」

平太郎はそうは決して思わなかった。この程度ならよいのではな

いか、そう思っていた。

「はい、化け物は害を為すもの。このままだといずれ貴殿の御命にも関わりましょう」

「はあ」

納得がいかなかったがどうも逆らえない。確かに彼も今まではそう考えていたし刀を振るった。今も用心して寝ている。だがそれでも違うような気がするのである。

「私は特に困っておりませんが。今はこの家に一人でおりますし」
「その油断が命取りですぞ」

だが上田は引かない。どうもかなり頭が固いようだ。

「御命をなくされてから後悔されても手遅れです。そうならない前に手を打たないと」

「まあそうなのですが」

どうしても納得できない。どうも一方的に過ぎるようにしか思えない。

「どうしてもそうしなければなりませんか」

最後のつもりであった。そう尋ねてみた。

「どうしても」

やはり強い声であった。もう言っても無駄だと思った。

「わかりました」

平太郎は観念してそれを認めた。

「それでは宜しく願います。謝礼は明日お支払い致しますので」

「いや、それはいりませぬ」

だが上田はそれは断った。

「拙者は暮らしには満足しております。それにこれは武芸者としての勤め」

「左様ですか」

「はい。ですから安心してお任せ下さい。必ずや化け物を退治して御覧に入れましょう」

「わかりました」

そこまで言うのなら仕方がない。平太郎は彼に任せることにした。こうして上田は平太郎の家に留まることになった。そして夜になり化け物が姿を現わすのを待った。

「どの様なものが出ますかな」

二人は居間で話々そひながら待っていた。上田が彼に問うてきた。「わかりませんな。何しろ色々出て来ておりますので」

「確かに。お話を聞くと実に多く出ていますな。こんなのは拙者もはじめて聞きました」

「やはり」

平太郎自身も薄々そう思っていた。これ程までに様々なことが起こり、化け物達が入れ替わり立ち代わり出て来ているのだ。

こんなことは書でも読んだことがない。彼はそれをよくよく考えてみた。

「一つのものでしょうか」

「違うでしょうな」

上田はきつぱりとそう言い切った。

「それにしては種類も数も多過ぎます。一つのものならばいささかそれぞれの趣きがあるのですがどうもそういったものはありませぬ」

「はあ」

「これは何やら黒幕がいると思われます。確か貴殿は比熊山に登られたのですな」

「ええ」

「おそらくあの山に問題があるのでしょうか」

上田は確かな声でそう言った。

「やはり」

平太郎にももうおおよその見当はついていてた。

「山には昔から様々なものが棲んでおります」

「はい」

それは平太郎も知っていた。鬼や天狗の話は子供の頃からよく聞かされているからだ。

「今ここに現われるという物の怪共は比熊山に棲む者共でしょう」

「やはりそうですか」

「はい、そして貴方は彼等の気に触る様なことを知らず知らずのうちにしてしまった。思い当たることはありませんか」

「そうですねあ」

彼は言われてふと考え込んだ。

「そういえばあの時石に少し腰掛けましたが」

それをふと思い出した。

「それですな」

上田はそれだとすぐに直感した。

「おそらくそれです。その石は化け物にとって何か特別なものであったのです」

「あの石がですか」

今思い出しても何の変哲もない石であるが。平太郎にはそれがどうして化け物と関係あるのはよくわからなかった。

「化け物には化け物の世界があります故」

上田はそれについてはこう言った。

第十二章

「あの者達にはあの者達の決まりごとがあるのです」

「そうなのですか」

「はい、だからこそその石にもこだわるのでしょうか。その石は彼等にとつては神聖なものであつたと思われます」

「はあ」

化け物に神聖なものがあるのか、と不思議に思ったがどうもあるらしい。やはり化け物の世界はよくわからない。

「奴等はそれを汚されたと思ひ貴方の家に来ているのでしょうか。おそらく恨みを晴らす為に」

「そうですね」

それにしてもやはり方が大人しいと思った。実際には命の危険を感じたことはなかった。大入道にしる女の首にしる彼には危害を加える意図はあつても命を狙つてまではいないように今では思えた。

「このままだとやはり御命が危ないです」

それには疑問を感じている。だが上田は自信満々である。

「やはりここは毅然としていきましょう。今日で怪異を終わらせるつもりで」

「そうですね」

これには賛同しかねた。だが上田のやる気を見ているとどうしても言えない。

「よろしいですな」

「ええ」

平太郎は引き摺られる様にそれに従つた。普段の彼からは思いも寄らぬことであつた。

こうして上田は化け物退治に取り掛かることになった。札や経典等も取り出してきた。

「おれですか」

「はい」

上田は答えた。見たところ彼の流儀は僧侶のそれに近いようだ。「まあここはお任せ下さい。必ずや退治して御覧にいますので」

そう言いながら刀も取り出していた。完全にやる気である。夜も深くなってきた。二人が待っていると障子の向こうに何やら見えてきた。

「むっ」

それは細長いものであった。数えきれぬ程ありそれがふわふわと空を舞っていることが障子越しにもわかった。

「これですね」

「はい」

平太郎は上田に問われ頷いて答えた。流石にもうこれが何だかわかるようになっていた。

また障子がひとりでに開いた。そしてその細長いものが入ってきた。

「今日は何かのう」

平太郎は悠然を腕を組んで座って見ていた。それに対して上田は柄に手をかけ片膝を立てて身構えている。その懐には札や経典がある。

細長いものはよく見れば輪であった。白く月の光によく映えていた。

「これは一体……」

上田はそれに戸惑っていた。今目に見えているそれが何であるか全くわからなかった。

何をするべきかわからなかった。ただそれを見るだけであった。平太郎はそれをよそにその輪をまじまじと見ていた。見ればその先の方に顔がある。

小さいが目も鼻も口もある。そしてどれも平太郎や上田を見て笑っていた。

「あの」

上田は戸惑いながらそれを見ていた。

「これが化け物ですか」

「ええ」

平太郎は答えた。特に驚くことはなく落ち着いたものである。

「まあ落ち着いて下さい。特に害はありませんから」

「はあ」

上田は彼に言われるままに膝を下ろした。そして座り込んだ。

「まあ一杯どうですか」

平太郎はそんな彼に酒を勧めた。

「しかし」

だが上田は乗り気ではなかった。化け物が気になって仕方がないのだ。

「放っておいても大丈夫ですか」

「ええ」

あからさまに不安そうな上田に対して平太郎は落ち着いたものであった。

「気を張る必要は少しはありますがね。けれど見たところ今日のは何もして来ないでしょう」

「そうですね」

「まあ心配なら壁にもたれかかって休まれることですか」

「壁にですか」

「ええ、こうやって」

丁度酒も切れた。平太郎は壁にもたれかかってみせた。

「こうして休むといざという時に対処し易いですし。刀を持っていれば安心でしょう」

「はあ」

平太郎を見ても何だか落ち着かなかった。だが上田は彼がこれ程自然に対応しているのが信じられなかった。

「ではお休みなさい」

平太郎はそう言うと言つて眠りに入った。暫くするとすうすうと寝息を

立てはじめた。

だが上田は違った。まだ目の前を飛び笑いかけてくる輪が気になつて仕方がないのだ。

「大丈夫なのか」

そう思い心配でならなかった。とても寝られたものではなかった。まんじりともせず彼等に注意を払い続けた。そして遂に朝を迎えた。

平太郎は鶏の鳴き声と共に目を覚ました。それと同時に輪は全て消えていた。

「ふうう」

彼はゆっくりと目を開けた。ごく自然に朝を迎えた感じであつた。

「おお、お早うございます」

そして上田に声をかけた。実に血色のいい顔であつた。

「ええ」

それに対し上田は憔悴しきつたものであつた。彼は結局一睡もできなかつたのだ。

「おや、眠れませんでしたか」

「はい」

上田は力ない声で答えた。

「昨日のあれがずっと飛んでいましたので」

「そうでしょうね」

平太郎に憔悴したところはなかった。実によく眠れたという感じであつた。

「こんなのが毎日ですか」

「はい。お払いはされなかつたのですか？」

「しようとはしましたが」

「それで」

見れば懷の札はそっくりそのままあつた。使わなかつたらしい。

「何の効果もありませんでした。どうやら私の知らない妖怪のようです」

「そうですか。その札は何だったのですか」

「狐狸のものと生霊、死霊の為のものでした」

「妖怪のものはなかったのですね」

「それはこれで対処するつもりでした」

「そう言つて刀を見せた。」

「あれではとても切れるものではありません。どうしていいやら
「そうでしょうなあ」

平太郎は何処か他人事のように答えた。

「とても切れるものではありませんから」

「ええ、確かにそうでした」

彼はもう話すだけで限界のようであつた。疲れが見てとれた。

第十三章

「これからどうなさるおつもりですか」

平太郎は彼に問うた。

「それは」

彼は疲れきった声で答えた。

「今日で失礼させて頂きます。拙者には限界でござる」

「左様ですか」

こうして上田はすぐに立ち去った。一睡もできず憔悴しきった足取りで平太郎の家をあとにした。

「やはり無理じゃったか」

彼はそれを見送りながら呟いた。

「まあそれも当然か」

そかしそれは予想されたことであつた。

「どうやらわしはこのままここで暮らしていくしかなさそうじゃな」
そして家の方を振り返った。

「何時まで出るかわからんが暫く化け物と一緒に暮らしていくことにするか」

次第にそんな気持ちになつてきた。

そう思えるようになるとかなり楽になった。彼は今夜からは布団でゆつるりと寝ることに決めた。

「もう蚊に食われるのも嫌じゃいな」

今までは蚊帳の外で寝らざるを得なかった。蚊帳の中からはよく見えないからだ。

とりあえず閉まっていた蚊帳を再び取り出した。そして夜に備えるのであつた。

夕方になると蚊帳を張った。そして夜に備えた。

「さてと」

蚊帳を張り終えた平太郎は夕食を採りながら考えた。

「今夜は何が出て来るのかのう」

何かわくわくとするものがあつた。彼はそれが待ち遠しくて仕方がなくなつていた。

夕食を食べ終えると何やら台所から臼をつく音が聞こえてきた。

「今宵は臼か」

台所に行つてみると臼がひとりでにつかれている。これまた面白い光景だ。

「これだけじゃと勿体ないのう」

そう思つた平太郎はそこに米を入れた。そしてそれで米を白くしようと思つたのだ。

「何もしないよりいいじやろう。無駄ではなかつた」

使えるものは使おうと思つた。怪異も使いようである。

そして寢室に戻つた。もう寝るつもりであつた。

蚊帳の中に入る。そして刀を枕元に置き掛け布団をかけうとうとと眠りに入つた。

意識が遠のいていく。だがそこで彼は起こされることになった。

何かが顔を這っている。ヌルヌルして気味が悪いものだ。

「ん!？」

不審に思い目を開けた。するとそこにまたもや化け物がいた。

「今宵は臼だけではないのか」

見れば赤く細長いものが平太郎の顔を撫で回しているのだ。

それは上から生えていた。面妖なことにそれは蚊帳を通り抜けて天井に続いている。

天井にはさらに奇怪なものがいた。それは巨大な醜い老婆の顔であつた。

老婆は平太郎を見てにやにやと笑っている。その大きさは天井を覆い尽くしていた。

口からはその赤いものが出ている。平太郎の顔を撫で回す、いや嘗め回していたのはこの老婆の舌であつた。

「また気色悪いことをするのう」

平太郎はこれには気分を悪くさせた。だが不快に思ったただけでそれ以上は何も思わなかった。

蚊帳を通り抜けているのが奇妙であつたがそれは化け物の所業なのでそれはそれで不思議なことに納得がいった。納得するとどうでもよくなりまた眠りについた。

暫く舌が嘗めていたがそれも止まった。そして彼は朝までゆっくりと眠った。

起きるとまず台所へ向かった。そして昨夜の臼を覗き込んだ。

「白くなっているかな」

だが米は白くはなっていなかった。それを見た平太郎はいささか落胆した。

「まあ化け物に期待しても無駄じゃな」

結局人間ではない。これも致し方ないことであつた。

第十四章

次の日も蚊帳の中に入った。もう何が来てもさして驚かない。危害も加えられるわけでもないとわかつていたので悠然としていた。

「落ち着くのう」

彼はゆつたりとしていたがそれでも化け物が怪異がやって来るのを待っていた。

今夜は何が来るか、それを考えていた。

「昨日の婆は中々面白かったが」

だが続けて来るとは思えない。

「では何か」

しかしそれはわからない。とりあえず化け物が来るまでわからないのであった。

待っていると不意に天井が下がってきた。ゆつくりと下がって来る。

「むっ」

それは蚊帳に迫って来た。そしてそのまま蚊帳をすり抜けてきた。「またか。よくすり抜ける蚊帳じゃのう」

思わず苦笑した。これで傷一つないのだから実に優れた蚊帳である。

蚊帳は尚も下がってくる。そして平太郎の鼻先まで来た。

「わしまですり抜けるかのう」

そう思っていると本当にすり抜けた。そして彼は天井の裏を見ることになった。

「ふむ」

横を見れば行灯もすり抜けている。潰されもしていない。

「これまた妙なことじゃのう」

何と天井裏を見ることができた。見ればゴミだらけだ。

「うっむ」

平太郎はそれを見て反省の念にかられた。

鼠の糞や蜘蛛の巣の古いの等がある。その他にも色々とある。かなり汚い。

「そういえば天井裏は今まで全く掃除もしていなかったのう」

そのあまりの汚さに辟易してしまった。

「また頃合いを見て掃除をしておくか」

彼は綺麗好きである。やはり家は汚いのより綺麗なのがいいに決まっている。あらためて反省した。

だが反省はしたが他には何もしなかった。どうも天井裏から何か出て来るわけでもないようだ。

「これだけかのう」

そう思っていると天井は上上がりだした。そしてすぐに元の高さに戻った。

「終わりか」

だがそれで終わりではなかった。今度は天井に大きな蜂の巣が姿を現わした。

「蚊帳は効くかのう」

中から出て来るであろう蜂だけが気懸りであった。だが蜂は出ては来なかった。

そのかわりにそれぞれの穴から泡や黄色い腐った様な水を出してきた。そしてそれを平太郎の左右に落としてくる。

「蜂ではないのか」

それでは心配する必要もない。平太郎はそれが落ちるのを悠々と眺めているだけであった。

やがて蜂の巣は次第に小さくなっていった。そして消えていった。「終わりか」

それでその日は終わりだった。もつとも平太郎自身は蜂の巣が消えるのを見届けるとすぐに眠りについていた。

二十日は飲んでいた。丁度親しい者から祝いの酒をもらったのだ。それもかなりあった。樽一つである。酒好きな平太郎の喜びは如

何程のものがあるうか。

「これはいい祝い物じゃ」

彼は大喜びで飲んでいた。しかもかなり美味い。

肴には干し魚があった。鮎である。

彼は細かく切ったそれを口に入れながら飲んでいた。気持ちはかなり楽しい。

だが一つ不満があった。だがそれは気にしてもせんないことであつた。

「他に共に飲む者がおればのう」

彼は飲みながらそう思わざるをえなかった。

「といつても誰もおらんし。権八殿を呼ぶにはちと時間が遅い」

もう夜もかなり更けていた。ここで障子の向こうから何やら声がしてきた。

「酒か」

「上等の酒があるのか」

声はとりあえずは人間のものである。だがその主が人間ではないことは平太郎にはよくわかつていた。

「おお、あるぞ」

平太郎はそれがわかつていながらあえて彼等に対してこう言つた。

「飲みたいか」

そしてこう問うた。

「おお」

「勿論だ」

彼等は口々にこう答えた。

「では来い。ただしじゃ」

彼はここで注文を出した。

「肴を持って参れ。そして酒も足りなくなったら持ってきて来い。そうすれば皆で飲もうぞ」

「よし！」

向こうでそれを了承する声がした。すると暫くして障子の向こう

に異形の影達が姿を現わした。

「よし」

平太郎はそれを見てにいと笑った。見ればそこから様々な化け物達が杯を手にやって来る。

第十五章

尾が二つになった巨大な二本足で歩く猫がいる。猫又だ。他にも古狸や狐もいる。天狗や鬼までいる。

「またえらく大勢いるのう」

平太郎は一向を見て思わずそう呟いた。

「酒があると聞いているのう」

猫又が楽しそうに言った。

「それでは来ないわけにはいくまい」

狸もそう言った。見れば他の者達も同じ意見のようだ。

「では追加の酒や肴はあるのだろうな」

「無論」

鬼がそれに答えた。

「ほれ、ここに」

彼は障子の向こうから樽をもう二つ持って来てそう言った。

「肴もな」

狐と言った。彼等は手に揚げを入れた籠や干し魚を多量に持っていた。

「おお、これはいい」

平太郎は新たな酒樽を見て目を細めて頷いた。

「これだけでも飲みきれぬかもな」

「その心配はない」

天狗がそれに対して答えた。

「わし等にとつてはこの程度何ともない」

「もっともお主にはしんどいかも知れぬがな」

ここで猫又達は平太郎をからかうようにして言った。

「無礼なことを言うのう」

平太郎はそれを聞くとあからさまに不機嫌な顔をした。

「わしがどれだけ飲めるのか知らぬようだな」

「まあな」

妖怪達はそれに対して答えた。

「どうやら毎日飲んでおるようだがな」

「それでもわし等には勝てまい」

「言つてくれたな」

彼等の挑発に口を尖らせてきた。

「では見せてやろうか、わしの飲みっぷりを」

「おお、見せてみよ」

「もしわし等を納得させられたら酒樽を二つやるぞ」

「何」

それを聞いた途端平太郎の目が光った。さらに飲めるのかと思うと思わず目を輝かさざるを得なかったのだ。

「ならば」

彼は杯を持ち替えた。大杯を取り出して来た。

「ほう」

それを見た妖怪達は思わず声をあげた。

「それで飲むつもりか」

「そうじゃ」

平太郎は得意気に応えた。

「これでどんどん飲んでやろうぞ」

「どんどんか」

「そうじゃ。では注ぐがよい」

そう言いながらその大杯を前に出した。

「片っ端から飲んでやる故」

「よし」

妖怪達もそれに応えた。すぐにその大杯に酒をなみなみと注いだ。

「飲んでみよ」

「ぐい、とな」

「よし」

平太郎はそれを両手に持つてにやりと笑った。そして口に着けた。

ぐい、ぐい、ぐい、と音を立てて飲む。まるで水を飲む様に飲んでいく。

「おお」

「これは中々」

妖怪達はその見事な飲みっぷりに感嘆の声をあげた。

忽ちのうちに全て飲み干した。だが平太郎は杯をまた前に差し出した。

「もう一杯」

更に飲もうというのだ。

「そうこなくてはな」

「面白くとも何ともないわ」

妖怪達もそれに応えた。その杯にまた酒を注ぎ込む。

平太郎はそれも瞬く間に飲み干した。そして干し魚を口に入れると嚙んで飲み込んだ。

「おかわりじゃ」

そしてまた飲み干す。これを幾度となく繰り返した。

そして樽を一つ空にした。だが顔色は普段とは全く変わってはいない。

「どうじゃ、わしの飲みっぷりは」

空になった樽と大杯を妖怪達に見せつけながら問う。その顔は勝利者のものであった。

「うつむ」

妖怪達はそれを見て思わず唸った。

「まさか樽一つ飲み干すとはのう」

「いやはや、見事なものじゃ」

「ふふふ」

平太郎は余裕の笑みを浮かべていた。妖怪達の鼻を明かせたことが何よりも楽しかったのだ。

「では約束通り樽を二つもらえるのであろうな」

「無論じゃ」

「わし等も嘘はつかん」
彼等は言つた。そして鬼が樽を二つ抱えて来た。

第十六章

「ほれ」

そしてそれを畳の上に置いた。

「約束じゃ。好きなだけ飲むがよい」

「うむ。確かに受け取った」

平太郎は受け取ったことを言った。そこでまた彼等に言った。

「では祝いに飲みなおすとするか」

「何と」

これにはさしもの妖怪達も呆れてしまった。

「また飲むというのか」

「お主はうわばみか」

「うわばみ」

酒を何よりも好む大蛇の妖怪である。平太郎はそれを聞いて辺りを見回した。

「そういえばおらぬのう」

「ふざけるでない。お主のことじゃ」

妖怪達は平太郎に対して言った。

「わしか」

「そうじゃ」

またもや口を揃えた。

「他に誰がおるのじゃ」

「全くじゃ。うわばみでもこれ程は飲まんぞ」

「そうか、そうか」

平太郎は妖怪達の呆れた声を聞いてさらに機嫌をよくした。

「わしは化け物より凄いのか」

「まあなのう」

天狗が渋々ながらそれを認めた。

「わしでもそこまでは飲めはせぬからな」

鬼もだ。見れば猫又も狐も狸も領いている。

「まあ今日はお主に酒をやったと思えばよいか」

「わし等も結構飲ませてもらったしな」

「うむ、まあこれで今日は納得するでしょう」

どうも彼等も酒をかなり飲むことができ満足しているらしい。上機嫌で席を立った。

「それではな」

「あとはお主だけで楽しむがいい」

そして彼等は平太郎の家をあとにした。平太郎は一人になった。

「ふむ」

彼は大杯に自分で酒を注いだ。

「よくよく考えてみれば」

とあることに気付いた。

「化け物共と話をしたのは今のがはじめてじゃのう」

面白いことだった。そういえば今まで話なぞしようとも思わなかった。

「話してみれば中々いい奴等じゃ」

ここで目の前に置かれている二つの樽に目をやった。

「こんなものまでくれたしのう」

そしてまた飲みはじめた。その日は心ゆくまで酒に親しんだ。

翌二十一日は流石に飲んではいなかった。二日酔いで苦しかったからだ。

「やはり飲み過ぎたかのう」

彼はその場では幾らでも飲める。だが次の日にはその酒がかなり残っているのである。

こうした体質であった。しこたま飲んでも酔わないが次の日にも残っている。こうしたことを見るとやはり彼も人間であった。

さてこの日は書を読んでいた。酒は行く水で何とか抜いた。ようやく頭がはつきりとしてきていた。

今読んでいるのは平家物語である。平太郎はこの書が特に好きで

あつた。

「入道殿か」

彼はその中でも平家一門に思うところが多かつた。榮耀榮華を極めながらも滅んでいった。その有様は実に物悲しい。天下を手中にしたというのに彼等は滅び去つたのだ。

「これも世の中の摂理か」

歴史を知らないわけではない。その後の源氏のこととも彼はよく知つていた。

だからこそ思つのである。人の世は実に無常なものであると。

「どの様に強い者でも必ず死ぬ。滅びぬ者はおらぬ」

平家物語からそうしたことを学んだ。滅せぬ者なぞいないのだ。では武芸は無意味か。決してそうではない。

悪源太義平にしる木曾義仲にしる彼等はそれぞれの生き様を貫いた。今井兼平も斉藤実盛もだ。どうして彼等を褒めずにいられようか。思わずにいられようか。

「わしもこうなりたいものだ」

平太郎は彼等のことを読む度にそう思う。そしてさらに武芸に励むことを誓つのであつた。

そうして読み進んでいく。ふと行灯に目をやった。

「蠟燭は大丈夫かのう」

見ればまだかなり高い。当分は安心だつた。

紙に包まれて淡い光を放っている。その周りに蛾が二三匹飛んでいる。

他には何もいなかった。紙をこして蛾の影がちらちらと見えるだけであつた。

しかしそこに急に別の影が映つた。

「むっ!？」

それは人のものであつた。それは今の平太郎と同じ様に書を読んでいた。

「今宵の客か」

彼はそれが何であるかすぐにわかった。そして平家物語から目を離しそちらに顔を向けた。

見れば何やらぶつぶつと口を動かしている。耳を澄ませば何かを唱えているようだ。

だが何を唱えているかまではわからない。結局平太郎はそれは無視することにした。

「仕方ないのう」

そして書を読むのを再開した。目が疲れて書を閉じるとまだ映っていた。

「すまぬが今宵はこれでな」

ふう、と行灯の火を吹き消した。そうするとその影も消え去った。それを見届けるとその場を後にした。そして蚊帳の中に潜り込んで眠った。

翌二十二日は早くに起きた。そして修練に励み道場で教えた。

弟子達が帰り一人になった。道場を後にする頃には夕方になっていた。

「今夜は何が出るかのう」

そう考えながら居間に向かった。すると早速いた。

「おお」

見れば居間を箒が掃いている。これは有り難いことだと思った。

第十七章

「気が効くもう。近頃何かと忙しいわ気分が落ち着かぬわで掃除もしていなかったわ」

平太郎はそれを見て目を細めた。居間が綺麗になると箒は飛び去り元の玄関に戻った。

その日はこれで終わりであった。居間が綺麗になったことで平太郎は満足した。

だが次の日はその折角の掃除が無駄になってしまった。

夕方から椀や机等家財道具が飛び交った。それを見た彼はとりあえず頭に座布団を被りそこから襖の中に隠れた。

「これは危ないのう」

そして安全な場所からそれを見守った。家財道具は飛び交うだけでこれといったことはない。別に平太郎を狙っているわけでもない。だが彼は面白くはなかった。

「昨日掃除してくれたのは何だったのじゃ」

あらためて化け物の気紛れさに腹が立った。だがすぐに思い直した。

「化け物じゃな」

結局その一言で済む話であった。

「化け物が何をしようとおかしなことはない。そう思えばわかるな」
そう思うと妙に納得できた。彼はその日は襖の中で休んだ。

「明日のことは明日考えればよい」

少し暑いがそれでもよく眠れた。目が醒めて出てみると家財道具は元の場所に帰っていた。それを見た彼はとりあえずはホッとした。
「掃除をしなくて済んだわ」

彼が心配したのはそれだけであった。だがそれがなくて一息ついたのであった。

二十四日は夕方から出て来た。まずはやけに大きな蝶が姿を現わ

した。

「蝶の妖怪か」

考えてみるとこれは今まであまり聞いたことがない。中々珍しいものである。

異様な大きさだ。驚位はある。色は虹色であり実に美しい。そのまま見ていると飽きない。

「これはいいのう」

こちらに何かをしてきそうでもない。彼はその蝶をゆっくりと眺めることにした。

蝶はゆっくりと飛びながら柱の方に向かう。そしてそこにぶつかった。

すると蝶は揺れた。少し動きを止めたかと思うとそこから無数に分かれた。

「ほう」

平太郎はそれを見て声をあげた。まさかここで分かれるとは思わなかったからだ。

「どうなるかのう」

そしてその次の動きを見守る。無数の蝶は銘々に飛びはじめた。よく見るとどの蝶も姿形が異なる。白い蝶もいれば青い蝶もいる。赤いのも黒いものいる。大きさも実に多様である。それが平太郎の周りを飛び回る。それだけでかなり美しい光景であった。

「よいぞよいぞ」

彼は上機嫌であった。そしてそれを悠然と見ることにした。

蝶の飛ぶのを見ていると時間が経つのも忘れる程であった。だがそれもやがて終わった。

明け方になったのだ。鶏の声がすると蝶達は煙の様に消え去った。「やはりな」

この蝶達も妖怪変化の類であることはわかっていた。だが怖くはなかった。

むしろ楽しい。ましてやこの蝶達は実に美しかった。

「こんなものならば今宵も出て来て欲しいものじゃ」

彼はそう思つてすらいた。そしていいものを見ることができたという思いのまま眠りについた。

だがこの二十五日はそうはいかなかった。今度はかなり厄介なものが来た。

何と槍が来るのである。それは居間で自由自在に飛び回った。

「これはいかん」

さしもの平太郎も難を逃れることにした。

厩まで行つた。流石にここまで来ないような。

「ここなら一安心か」

どうやらそのようであつた。彼はその日はここで休むことにした。
「ぶるる」

枯れ草の上に寝転がると馬が顔を近付けてきた。いつも乗っている馬だ。可愛がつている。

「おお」

彼はその愛馬の顔を見て安心した。

「お主が側にいてくれるか、今宵は」

馬は答えない。だがそのかわりに平太郎の顔を舐めてきた。

「ははは、よせ」

彼は笑いながらそれを手で退けた。

「お主の気持ちにはわかつた。では今宵は二人でゆつりと休もうぞ」

「ひひーん」

馬は答える様に鳴いた。そして彼の側に寝転がった。

「うむ」

平太郎は彼の腹の上に頭を置いた。そして腕を組み休んだ。

朝の目覚めはまたいつもとは違つていた。どうも気持ちがいい。

「ふああ」

起き上がるともう朝日が差し込んでいる。雀の鳴く音も聞こえている。

「これもなかなかよいのう」

馬も目を醒ました。そして主に挨拶する様にいなないた。

「うむ、お早う」

彼は愛馬に声をかけた。そして起き上がり居間に向かった。

「どうなっておるかのう」

流石に不安であつた。いつものよりも遙かに剣呑なものが飛び交つていたのであるからそれも当然であつた。

用心しながら居間を覗く。朝なのでもう何も飛び交つてはいなかった。

「どうやら安心かのう」

しかしまだ油断はできない。彼は慎重に中に入った。

槍は一本もなかった。どうやら他の場所に移つたらしい。

屋敷の中を探ると元の蔵の中にあつた。見れば蔵の鍵が壊れている。

「そういえばまだ修理していなかつたな」

平太郎はそれを見て舌打ちした。鍵が壊れているのは実は前からわかつていた。

だが打ち捨てていたので。どうせ中には大したものもない。この蔵とは別の蔵に置いていたのだ。

ここには古い服や昨夜飛んでいた槍等しかなかった。この槍にする先は錆びて到底使い物になる代物ではないのである。

「夜のせいで見えなかつたか」

またもや舌打ちした。どうもこれは彼の武士としての不用心を戒めることのような気がした。

そう思つた彼は反省した。そしてすぐに人を呼び鍵をなおさせた。そして槍の刀身も付け替えた。

「化け物に教えられたわ」

いささか面白くなかつた。だが戒めにはなつた。

顔を顰めながら修繕された鍵をかける。その中には当然あの槍もある。

「これでよし」

彼は鍵をかけて言った。そしてその場をあとにした。

その日は夕刻になると急に騒がしくなった。何でも隣の権八が重い病にかかったという。

「まことか」

隣の家に詳細を聞きに行こうと思った。今の時点では単に騒ぎ声が聞こえるだけである。これでは何があだか全くわかりはしない。居間を出ようとする。だがここであやかしが姿を現わした。

「こんな時にか」

困ったがこれに対処せねばならない。何と柿が部屋の中に飛んできた。

「柿!？」

夏なのに妙なことだと思った。しかもよく見てみると赤々としている。増々わけがわからない。

だがこれも怪異だと思うと納得がいく。そう思えばどんなことでも納得できるので、だから気が楽といえそうなる。

平太郎は居間の真ん中に座り込んだ。そして床に落ちた柿を手にとった。

「どれ」

そしてそれをかじってみた。見れば本物の柿であった。

「むう」

不思議である。実に不思議だ。夏なのに柿が食えるとは。

「西瓜でも飛んで来たら不思議なものじゃが」

味はいい。適度に固く熟れ過ぎてもいない。

「わしの好みじゃな」

彼は柿は固めが好きである。熟れ過ぎて柔らかくなったものは好まない。

「皮も固くなるし汁が多過ぎる。あれだけは駄目じゃ」

酒は好きだがこうした果物も嫌いではない。この日は酒ではなく柿を楽しむことにした。

「とりあえず権八殿は明日でよいかのう」

隣ではまだ騒ぎが聞こえてくる。だがこれも妙なことに思えてきたのだ。

その理由は簡単であつた。騒いでいる声がどれも聞きなれぬものばかりであつたからだ。

「あれもあやかしの仕業か」

そう思えてきた。すると急に出て行く気は消えたのだ。

満腹になるとあとは拾い集めザルの中に入れた。そして溜め込んだ。

見ればかなりの数が集まつた。これだけで当分食うのには困りそうにもない位であつた。

「他の者にも分けてやるか」

第十八章

彼はその山の様な柿を見てそう思った。そして翌日それを実行に移した。

「柿はいらんか」

家の前で村の者に声をかけたのである。

「柿!？」

それを聞いた村人達は皆耳を疑った。

「それは嘘でしょう」

まず皆それを疑った。

「この季節に柿なぞ」

「そうでござる、平太郎様も冗談が過ぎる」

「おい、わしは冗談なぞ言わぬぞ」

だが彼はそれに対して口を尖らせた。

「大体わしが今まで嘘を言ったことがあるか」

「そういえば」

「ありませぬが」

平太郎は真剣であつた。ましてやこうした冗談は言わないしそれ以上に嘘を言わない人間であるのはよく知られていることであつた。

「信じるか」

彼はあらためて皆に対して問うた。

「はあ」

「そこまで仰るのでしたら」

皆どうやらそれが嘘ではないとわかつた。そして平太郎が手に持つザルの上に山盛りにされた赤々とした柿を見た。

「確かに柿ですな」

「それも赤々としている。実に面妖でござる」

「昨日居間に飛び込んで来たのじゃ」

平太郎はそれに対して答えた。

「おそらくこれもあやかしの類であらう」

「やはり」

皆何となくそうではないか、と思っていたがその通りであった。そう説明されると納得がいく。

「食べてみたが美味いぞ。皆の衆もたんと食うがよい」

「大丈夫ですか？あやかしのものだというのに」

「うむ。それは大丈夫だ。見よ、何ともないぞ」

彼は自分自身を指で指し示して言った。

「このわしは何よりの証拠じゃ。他に証拠がいるか」

「いえ」

彼等はそれで納得した。どうやら一応食べても大丈夫なようだ。

「それでしたら」

彼等はそれぞれ柿を手にとった。そしてそれを口に運んだ。

「ふむ」

かじってみる。甘みが口の中に広がる。微かな渋みもあった。やはり柿である。

「美味いですな」

「確かに。まごうかたなき秋の柿じゃ。まさか夏に柿が食えるとはのう」

彼等は最初は異様に思ったがいざ口にしてみるとその思いは何処かに消え去った。食べてみると実に美味いからだ。美味しいものはそうした思いを見事に消し去ってしまうのだ。

「いや、これは中々」

「実にいいすなあ。どれもかなり美味しいですぞ」

「確かに。こんな美味しい柿は滅多にない」

彼等は口々に言った。そして季節外れの美味な柿を心ゆくまで堪能したのであった。

「ふう、食った食った」

「平太郎様、有り難うございます」

彼等は満腹し満足してその場を後にした。だが柿はまだまだ残っ

ていた。

「さてこれだが」

見ればかなりある。平太郎は隣の権八にも持って行くことにした。本当に危篤ならば放つてはおけぬ。柿は身体を冷やすというが「権八は大の柿好きである。持って行っても嫌な顔はされないだろう。そう思い持って行くことにした。」

「もし」

彼はザルの上の柿を手に権八の家の門のところで声をかけた。程なくして声が返って来た。

「おう」

それは権八のものであった。声を聞く限りどうやら元気そうであった。

「やはりな」

どうやら昨日の騒ぎはあやかしの仕業であるようだ。彼はその声を聞き納得した。

「おお、平太郎殿か」

彼は血色のよい顔で出て来た。危篤だったとは全く思えない。

「一体何の用じゃ」

「うむ。実はな」

彼は持っている柿を彼に差し出した。

「昨日化け物がうちに次々と投げ込んでくれたものじゃ。どうじゃ」

「おお、これはいい」

やはり彼は柿が好きであった。満面に笑みをたたえそれを手にした。

「有り難く受け取らせてもらうぞ」

「うむ」

平太郎はそれを手渡した。権八はにこにこしている。

「美味そうじゃな」

「うむ。昨日たらふく食ったがかなりいけるぞ」

「それはいい。では早速後で頂かせてもらう」

「そうすればいい。たんとあるからな」

「うむ、礼を言うぞ」

権八は笑顔で家の中に戻って行った。そしてそのまま消えた。

「元氣であつたな」

それだけで彼はほっとした。

「まあ大体わかつていたことであつたが」

それでも実際に目で見ると落ち着くものである。彼はそれを見届けると自分の家に引き揚げた。

第十九章

それからその日は道場も休みなので修練に励んだ。木刀を振り水練をしに川へ向かった。汗をかき水で身体を冷やした。終わった時は実に気分がよかった。

二十七日は夜遅くになっても化け物は姿を現わさなかった。彼は蚊帳の中で寝転がりながら化け物を待っていた。

「今宵は遅いのう」

楽しみにしているというのに何ということだ、と内心憤りすら感じた。

「まあこのまま待つとしよう。来なかつたらそのまま寝ればよい。来たら奴等が起こしてくれるだろう」

いささか勝手な考えを抱いていた。そしてそのままうとうととした。

すると早速出て来た。暗闇の中で何かが彼の頬を撫でた。

「来たな」

目を開けると目の前にいた。見るとそれは手であった。

「これは」

それも女の手だ。上から伸びている。

よく見ると上へ繋がっている。その付け根には何やら丸く大きなものがあつた。

そこには女の顔があつた。平太郎を見下ろしてにたと笑っていた。

「ふうむ」

彼はそれを見て思った。最初の頃に出て来たあの髪の毛で進む女の首に似ていなくもない。

だが何かが違う。あの首に比べて恐ろしさが少ないのだ。

「わしが慣れたせいなのう」

だがどうも違うようだ。この首は手で平太郎の頬を撫でた後はこ

れといって何もして来ないのだ。

ただ彼を覗き込んで笑っているだけだ。無気味な笑いであるのは確かだが他には何もない。

やたら大きな首ではある。それだけで平太郎の身体の半分程はある。白粉とお齒黒で化粧をし髪はちゃんと結つてある。見れば中々整った顔立ちである。

「こんな女と夫婦になりたいものじゃな」

そう思わせる程の顔であつた。だがこの女は人ではない。見ただけ迷うことなくわかる。

「残念なことじゃな。まあ退屈はしておらぬが」

彼は笑いながらこの首と正対していた。首はやはり笑うだけでこれといって何もしては来ない。

やがて跳びはねながら姿を消した。そして蚊帳も障子もすり抜けて姿を消した。

「いったか」

静かになった。そうなると自然に眠くなってきた。

「では休むとするか」

いささか拍子抜けしたところもあるが暫くぶりに変わった妖怪を見る事ができた。それで満足したと言えはした。彼は目を閉じた。気が着くともう朝であつた。

二十八日は遠くに何やら光が見える。それも一つではない。

無数にある。それは青白く蛍のそれにしては奇怪な光であつた。

「さては」

今宵の妖怪かと察した。それを見る為に庭に出ようとする。

踏石の上の下駄に足を入れる。すると何やら異様に冷たい。

冷たいだけではない。ぶにやりと柔らかく、しかも足に粘りついてくる。何とも言えぬ妙な感触だ。

「蒟蒻を踏んだみたいじゃな」

そういえば似ている。この冷たさと柔らかさはまさに蒟蒻であつた。だがこの粘りは何なのか。

「餅かのう」

そこまではきつくはなかった。しかし下駄からは足はするり、とは抜けなかった。手間をかけて脱ぎ別の下駄を取り出した。

だがそれも同じだ。やはり冷たく柔らかい、それでいて粘りつく感触が足の裏に伝わった。

「うつむ」

気分がよくない。足の裏がこうだと如何ともしがたい。彼は庭先に出る気が失せてしまった。

居間に戻った。そしてそこから光を見ることがにした。

光は居間からでもよく見ることができた。蛍のそれにしては無気味な光だがそれなりに美しい。ゆったりと落ち着いて見ることにした。

「こうしていると別にここから見ても悪いわけではないのう」

彼はそう思えてきた。そしてそのまま見続けた。

光はやがて消えていった。そうすると彼は寝室に入って休んだ。

第二十章

「今宵はまた綺麗なものじゃった」

彼はその光を睨に思い出しながら呟いた。

「この一月の間本当に多くのものを見ておるな」

そこでふとそう思った。

「最初の頃は色々と思ったものじゃが今では楽しくて仕方ないのう」
彼はにやりと笑った。

「おかしなものじゃ。化け物といつても普通に付き合つておる。わしも図太いものじゃ。いや、違うかのう」

ここで思いなおした。

「化け物も人間も案外一緒なのかも知れんな。どういう理屈かはわからぬが」

思えば人間にも悪い者はいる。化け物にも気のいい者はいる。少なくとも酒を共にした天狗や鬼からは邪気は全く感じられなかった。

「ではそれ程付き合いに注意する必要もあるまい。何、命は一つ。どうとでもなる」

よしんば命を落としたらその時はその時だと思った。

「では寝るろしよう。願わくばずっと出て来て欲しいものじゃ」

だがそれは適わないだろうと思っていた。根拠はない。そう思うだけだ。

この日はそのまま深い眠りについた。そのまま朝まで目は醒めなかった。

次の日は夕方から出て来た。

「むっ」

不意に気配を感じた。上からであつた。

見上げると天井に無数の手が生えていた。それはだらりと垂れ下がっていた。

「ふうむ」

冷静にそれを見た。見ればどの手も青白くまるで死人の手の様だ。平太郎はここで何を思ったか孫の手を持って来た。そしてそれを手の前で振った。

「どうなるかのう」

猫の様に反応してくるかと思っただのである。だが反応は全くなかった。本当に死人の手の様に動かなかった。

「ただ生えているだけかのう」

さらによく見るとどれも女の手だ。小さく柔らかそうである。

暫く見ていると手は一つずつ天井に引っ込んでいった。そして全ての手が消えた。

手が消えると襖が急に開いた。するとその入口一面に老婆の顔があった。

「また婆か」

そういえば老婆の顔が度々出て来る。だが同じ顔ではない。

「別の婆のようじゃな」

平太郎はそれを確かめながら老婆の顔の前に来た。そしてそれをまじまじと見る。

「のう」

そして彼女に問うた。

「お主は先に出て来た者達の姉妹か何か」

だがその顔は堪えない。ただにたと笑いながら平太郎を見ているだけであつた。

「まあよいわ」

だが平太郎はそれを責めるつもりはなかった。

「答える気がないのならそれでよい。わしは別に答えよと無理強いはせぬ」

彼は老婆の顔の前にどっかりと座った。そして側に置いてあつた瓢箪と杯を手にとった。

「酒でも共に飲みたいがどうじゃ」

だがやはり答えない。相変わらずにたと笑っているだけであ

る。

「うつむ」

無愛想なのかそうでないのか。答えないから無愛想と言えるが笑っているのですとも言えない。彼はもうこの老婆に言うことを止めにした。

「一人で飲むとするか」

そして酒盛りをはじめた。暫くして上から女の騒ぐ声が聞こえてきた。

「先程の手の主達じゃな」

ここでもうやく先程の手が何故全て女のものであったか合点がいった。つまりあの手は今天井で騒いでいる者達のものであったのである。

声は確かに騒がしい。だがその他にはこれといって何もない。別に天井が下がってきたりとか落ちてきたりということもないようだ。

「ならばよい」

彼はそう割り切った。むしろ逆にこの声を酒の肴にすることにした。

「女の声聞きながら飲むのもまた一興」

そして酒を口にした。耳を傾ける。だが何を言っているかまではわからない。

「姦しいだけかのう」

遠くから何やら風の音が聞こえてきた。どうやら只事ではない。

「野分か」

夏である。野分が何時来てもおかしくない季節である。

風は次第に強くなってきた。平太郎はそれを見てすぐに立った。

「すまんが今はお主等の相手はできぬ」

老婆と天井にそう言うとともに家の戸締りにあたった。そしてそれが終わり居間に戻るともう老婆も天井の声も何処かへ消えていた。

「野分を感じたのかのう」

もう跡形もなく消えたその跡を見ながらそう思った。平太郎はま

た飲みだした。野分なら外には出られぬ。酒はふんだんにある。

「これも化け物の土産じゃな」

彼等からもらった樽の酒にも手をつけた。そして心ゆくまで飲みそのまま寝た。

起きるとやはり野分が来ていた。外から激しい風と雨の音が聞こえてくる。

「やはりのう」

彼の予想は当たった。とりあえずは二日酔いを抑える為また飲みはじめた。

「迎え酒じゃな」

出られないのなら飲むのが一番だ。彼はまた飲みはじめた。

昼になると風も雨も次第に弱まってきた。どうやら通り過ぎたようだ。

「行つたか」

平太郎は固く閉じていた雨戸を開けた。するとそこには一面の青空が広がっていた。

「おお」

実に綺麗な空であった。雲一つない。そして陽が雨にまだ濡れている地面を照らしていた。

水溜まりにその陽が映っている。光を反射してまるで鏡の様である。

「これは絶景じゃ」

平太郎は大喜びで外に出た。そしてそのまま村の中を歩き回った。そうやらあまり大きな野分ではなかったようだ。少なくとも風は大したことはなかったのか家々に被害はなかった。

雨は凄かったようである。川はかなり水かさが大きかった。

「大事はなかったようじゃな」

彼は村を見回してそれを確認した。そして今度は家に戻り馬を出してきた。

それに乗ると辺りを走り回った。酒は歩いた時にあらかた抜けて

いた。

「飲んでばかりだとなまってしまうわい」

辺りを駆け回った。それでひとしきり汗をかくと家に戻り行水で汗を落とした。

さっぱりした気持ちで居間に来るともう夕刻であった。空は次第に赤くなってきた。

「また夜になるのう」

最近ではそれが待ち遠しかった。今宵は何が出て来るのかと思うだけで楽しくなる。

いそいそと夕食を採り化け物を待った。空は赤から紫になっていった。

その濃紫の空に無数の星達が瞬いている。赤い星もあれば青い星もある。晴れ渡った夜空に無数に煌いていた。

「いいのう」

平太郎はその星達を満足気に眺めていた。星も好きである。

「天の川まで見えるわ。そういえば今年は七夕まで考えが及ばなかったわい」

それが残念であった。実は彼は毎年あの二つの星を眺めながら酒を飲むのを何よりも楽しみとしていたのだ。

だが見過ごしたものを今思っても仕方のないことであった。彼は来年見れたら見ることにした。

「その頃までに覚えておればよいな」

ひよつとすると忘れるかも知れない、もしかしたら死んでいるかも知れない。人の一生とは一寸先のことすら全くわからないものであるからだ。

星を見飽きると今に戻った。そこでゆっくりと化け物を待つことにした。

「さて今宵は何が出るかのう」

待っているとな意に一陣の風が吹いてきた。涼しい風であった。「野分が去ったのか」

面妖に思ったがこれもまた化け物の来る予兆と思うと納得がいく。ではそろそろ今夜の客が姿を現わす頃だ。

「来るか」

平太郎は敷物の上に座った。そして客を待った。

「今宵は何かな」

やがて障子の向こうに影が現われた。男の影だ。

見ると異様に大きい。丈は平太郎の倍程はあろうか。

「大入道かのう」

まずはそう思った。何かとと思っているうちにその影の主が居間に入ってきた。

「む」

見ると大入道ではなかった。確かに大きいが身なりのよい中年の男がそこに立っていた。

「お主は一体何者じゃ」

見れば本当に立派な服を身に着けている。能花色の帷子に浅黄色の袴、腰には両刀がある。歳は四十位で恰幅のよい身体つきをしている。見れば顔相もかなり良さそうだ。その背丈を覗けば大きな家の大名と言っても通用するであろう。そこまでの気品と風格が備わっていた。

「我が」

その男は問われてゆっくりと口を開いた。重く低い声であった。

「我は山本五郎左衛門という」

第二十一章

「山本五郎左衛門!？」

平太郎はその名を繰り返した。

「そうだ。我は人ではない」

「やはりな」

それはすぐに察しがついた。

「では一体何者じゃ」

「我は人でもなければ天狗でもない。かといって鬼でもない」

「ほお」

「魔王の類である。比熊山を城にする者である」

「比熊山か」

思い当たることが丁度あった。

「やはりあの時か」

「その通り」

山本と名乗ったこの異形の存在は答えた。

「あの時お主は岩に腰掛けたな」

「うむ」

平太郎は素直に答えた。隠すつもりもなかったし出来るとも思わなかった。

「あの岩は我等にとっては大事なものであったのだ」

「そこに腰掛けて怒りを覚えたということじゃな」

「そうだ」

彼は重い声で答えた。

「そして懲らしめてやろうと思ってお主のもとに家来達を送ったのだ」
「そうだったのか」

平太郎はこの一月ばかりの怪異を理解した。以前上田が彼に言ったこととほぼ同じであった。

「それでこの一月ばかり毎日化け物共がわしに会いに来ておったの

か」

「左様」

山本は答えた。

「無論お主の命を奪おうなどとは考えてはいなかった。懲らしめるだけにするつもりであつた」

「そうだったのか」

「こちらにはこちらの掟がある。人を殺めてはならないのだ。それに」

「それに？」

「我は人を殺すことは好まない。それは魔王としての誇りに関わるからだ」

「魔王としてののか」

「そうだ。少なくとも我はそう考えている」

中には恐ろしい魔王もいる。崇徳上皇や早良親王等がそうであると考えられている。

「上皇様や親王様は違つてお考えであろうがな」

「まあそれはそうじゃろうな」

それは平太郎もよくわかつていた。生前のことを思えばそれは頷ける。

「魔王といつても色々というわけだな」

「そうだ。少なくとも我はそうだ」

「ふうむ」

平太郎はそれを聞き大いに勉強になつたと思つた。彼は今まで妖怪も化け物も同じだと思つていた。考えることも同じであるとはかり思つていたのだ。

当然その首領である魔王もだ。皆上皇や親王と同じ考えだと思つていたのである。

「あの方々にはあの方々のお考えがある」

山本は言つた。

「それについては我は言つつもりはない。我は我だ」

「そうか」

どうも彼はそうした怨霊とは別の系列の存在のようだ。そういえば今まで死霊の類は見えていない。多くの妖怪変化がやって来たにも関わらずだ。

「それでもお主には無礼の罰を与えんと思いこうして一月手の者を送ってきたがすぐに慣れてしまった」

「まあもう」

彼は僅か数日程で慣れてしまった。そしてそれから逆には化け物達が出て来るのを待っていた程である。

「正直に言わせてもらうと我もそれには驚いた」

「ほう」

「もって数日で参ってしまったと思っていた。そうすれば引き揚げるつもりであった」

そうやら彼はそれ程強硬にやるつもりはなかったようである。

「懲らしめであるからな。ところがだ」

彼はここで一息置いた。

「お主は参らぬどころか逆に配下の者達を遊ぶ始末だ。我もそれに乗ったが」

「そうであつたか」

「お主の胆力には感服した。それで今日ここに来たのだ」

「挨拶というわけだな」

「その通り。実はまだ手があるのだが」

「それは何じゃ」

「我の知り合いに神野悪五郎という男がいる。天下無双の猛者だ」

「そんなに強いのか」

「人ではない。その強さは魔王の中でも屈指であろう」

「そうか」

平太郎はそれを聞きながら腕が鳴るのを感じていた。だが山本はそんな彼を嗜めるように言った。

「止めておけ。人では勝てはせぬ」

「それ程なのか」

「うむ。そうそう容易にはな。勝てるとしたら悪源太でも連れて来るしかあるまい」

言わずとした源氏きつての猛者である。

「こう言つては何だがお主では勝てぬ。だがもう神野は呼ばぬ」

「何故じゃ」

「お主の難は終わったからだ」

「終わったのか」

「そうだ。元々一月と定めていた」

どうやら山本は平太郎の下に配下の者を送るのは一月の間だけと考えていたようである。

「それは終わった。もうお主には何もせぬ」

「そうか」

本来は安堵するのだろうが彼は違っていた。少し寂しいものを感じていた。

「むしろお主の肝に感じ入った」

「肝にか」

「うむ。この一月の間よくぞ平気でいられた。これ程までの者は今まで見たことはなかった」

「そうか」

「その肝に褒美をやろう。我が来たのはその為でもある」

そう言つと懷から何かを取り出した。それは一つの槌であった。

そしてそれを平太郎に手渡した。

第二十二章

「槌か」

見れば外見はごく普通の槌である。

「無論ただの槌ではない」

山本は言った。

「これには我等の技が込められている」

「あやかしのか」

「そうだ。お主に危機があつたならばこれを使つがいい」

「これをか」

「そうだ。まずは北に向かう」

「ふむ」

「そしてそれで柱等を叩きながら我の名を呼ぶがいい。さすれば我はすぐに汝の下に現われよう」

「さようか」

聞いても現実のものとは思えない。実に奇怪な話ではある。

「しかし」

だがここで平太郎はあることに気付いた。

「お主は比熊山にいるのであるう。それならばこれは特に要らぬと思ふが」

「それか」

山本はそこで言った。

「我はあの山を離れることにした。九州を渡り南の島々に渡ろうと思ふ」

「南のか」

「そうだ。家臣と共に」

その家臣が今までの妖怪達であることは言うまでもない。

その南の島というのは琉球だろうか。平太郎はふと考えた。だがそうなるの一つ疑問が生じる。

何故北に向かつて槌を振るわなければならないのか。彼にはそれがよくわからなかったのだ。

「それもやがてわかることだ」

どうやら山本は彼が何を考えているかわかっているらしい。それに対して言った。

「我等の世界はこの世界とは異なるからな」

「異なるのか」

「そうだ。この日之本の国にあるのは同じだが次元が異なるとても言おうか。そもそも我等の世界は北にあるのだ」

「北に」

そう言われてようやく合点がいつてきた。北には死者の国があると言われている。

「我は死者ではないがな」

山本はそれにはそう断った。

「配下の者にも死者はいない。だがそこに我等の国がある」

どうやら妖怪の世界は死者の世界と同じ場所にあるらしい。そして彼等は付き合いがあるようだ。

そういえば上皇や親王のことを知っている。彼等も魔王だということならば当然そこにいるということになる。

「あの方々はかなり高貴な方々だがな」

山本は注釈をつけるように言った。

「我もそうおいそれをお顔を拝見することはできぬ」

「そうか」

「あの方々は恐ろしい。日之本に禍をなさんと常に考えておられる」
「それは聞いている」

平安京が出来た経緯も保元の乱のことも知っていた。だからこそ彼等の恐ろしさもよく知っていた。

「我にはそこまでの心も力もない。それは安心せよ」
「うむ」

魔王にも格があるようだ。そして出自も関係するらしい。

どうやらこの山本は妖怪の魔王であるらしい。人の姿をとつてはいるが妖怪であるようだ。

そつえば確かに彼の家臣達は皆妖怪であつた。魔王といっても色々あるようだ。

「さて」

山本はここで畏まつた。

「随分長居したな。長々の逗留忝い」

そつ言つて頭を深々と下げた。これには平太郎も慌てた。

「いやいや」

仮にも魔王というからにはかなりの身分である。その様な者に頭を下げられて恐縮してしまつたのだ。

彼も頭を下げた。やがて両者は頭を上げた。

「それでは失礼仕つた」

「はい」

最後は礼儀正しく終つた。山本はそのまま居間を出ると庭先に出了。平太郎はそれを見送る。

「いや、見送りは不要」

そつ言つが彼は見送つた。やはりそれが礼儀だと思つたからである。

「かたじけない」

山本はその心遣いに感じ入つた。表情は変わらないが彼のそうした行動が氣に入っているようである。

「肝だけではないのだな」

そつ言つた。彼の人間としての節度も氣に入つたのである。

「お主に槌を渡してよかつた」

そしてこつ言つた。それは心からの言葉であつた。

彼が庭先に下りるとそこに何やら異形の存在が現われてきた。見れば平太郎のところに来た者もいる。どうやら山本の配下の者達のような。

「それではな」

山本は最後にそう言う。と化け物達に護られる様にして囲まれた。そして籠の中にゆつくりと入った。

山本が入った籠はそのまま担がれた。そして化け物達の行列の中央に位置し運ばれて行った。

「うづむ」

見れば大名行列そっくりで。違うのはそれを形作っているのが人ではなく、化け物であるということか。そして化け物達は闇の中に消えていった。彼はそれを最後まで見送っていた。

こうして一月に及ぶ平太郎と化け物達の話は終わった。残ったのは一本の槌だけであった。

彼はそれを大事に蔵の中に閉まった。そしてそれを取り出すことはなかった。

「まことに強い者になりたい」

それが彼の願いであった。

「ならば他の者に頼つていては駄目じゃ」

彼はそう考えていた。だから槌を大事に閉まったのである。

そんな彼であるから化け物に対しても平然としていられたのである。それともそうだからこそ化け物に出会うことができたのか。それは誰にもわからなかった。

だが彼はこの一月の騒動でその名を知られることになった。彼に会いたいという者は列をなしその話に聞き入った。そして武者としても名を馳せるようになった。

「これが化け物の褒美かのう」

だが違うと思った。これはまた別だとわかつていた。

彼は自分の力でそれを得たのだ。化け物と正対しそれを受け入れた肝と度量があったからだ。それにより彼は名声を得たのだ。

今も稻生平太郎という名は残っている。そしてその化け物達の話も。主のいなくなった比熊山は今も残っている。そしてあの平太郎が座った岩もその場所に残っている。だが彼等は何も語らない。以前あったことを知りながらそれは決して語らないのである。

山本五郎左衛門の話

完

2004・10・14

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3098f/>

山本太郎左衛門の話

2010年10月8日15時32分発行